

中国の故事・伝説に取材した大小曆

相島 宏

はじめに

国立国会図書館は昭和五九年一〇月二三日から十一月二日まで、貞享二年（一六八五）に初めてわが国の曆法による貞享曆が使用されて三〇〇年を経た年に因んで、「日本の曆」展を催した。そこでは、具注曆や地方曆等とともに大小曆約五〇点を展示した。

大小曆は、月の大（三〇日）小（二九日）をめでたい図柄や当時評判の芝居等から題材を採って、絵あるいは狂歌、詩等で表現した一枚摺りの略曆の一種である。明治五年の太陽曆への改曆以前、わが国は月の朔望で月建てをし、太陽の運行で一年を知る太陰太陽曆を採用していた。一月は三〇日か二九日で、毎年月の大小の配列が変わるうえ、二―三年ごとに閏月があった。月の大小を記憶しておくことは、晦日の支払いや衣替等、実生活上重要なことであった。そのため、大小曆は年末に摺物として作られ、年頭の大小会で仲間と交換したり、年始の挨拶

に贈答品として顧客に配られた。草創は江戸貞享からで、最も隆盛をみたのは明和から寛政期にかけてであった。そして太陽曆の採用とともに必要性はなくなり、衰退し、消滅した。

同館では数百点に及ぶ大小曆を所蔵するが、これらの中から中国の故事、伝説に主題を採った数点を紹介したい。

I

図I「黄初平」は中国の仙人黄初平に取材した、天明七年（一七八七）の大小曆^{註三}。双髻の少年が棒状の鞭を持って立ち、その前には一頭の羊が岩から飛出してきたような情景を描いている。画面左側に、「初平年廿五而／牧羊後得為仙」と記す。右上部の陰刻白ヌキの篆書「扁大」とは、漢字の「偏旁」の偏のある字が大の月であることを示す。即ち、「初平年廿五而／牧羊後得為仙」とある中、一、四、七、九、一〇および一二月が大の月である。描かれた羊は千支を表わし、従って、ひつじ年一、



図 I

四、七、九、一〇、一二月が大の月は天明七年丁未で、当年の大小暦と判明する。

偏の有無で大小を表わす作例は、曆書や大小暦等曆類似作品の売買が禁止されていた、宝暦八年（一七五八）の「奉転読大般若経延命守護處」を最古とする。この場合は偏のある字を小の月とし、二、三、五、七、十一月。もっとも、有偏無偏大小はただいたずらに漢字を並べたのではなく、一つの文章になっ
ていなければならない。最も隆盛をみたのは明和から寛政年間
で、狂歌師・戯作者として著名な初代立川焉馬（一七四三—
一八二二）にはいくつもの作例が見られる。

閏月があつた安永七年（一七七八）の大小「満林留雪梅花瓮
潤雨復楊柳垂」は有偏が大の月で、閏七月を「潤」を用いて巧

妙に処理している。

「初平」は黄初平^{註四}。晋・葛洪撰「神仙伝」巻二に見える仙人で、丹溪の人。一五歳の時、家で羊飼いをさせられていた。一道士がその実直なのを見込んで金華山の石室に連れて行った。四〇年後に兄の初起が彼を捜しに家を出たが、幾年かかっても発見できない。しばらくしてやっと道士に遇うことができ、弟を尋ねあてた。悲喜こもごもの話のあと、兄は初平に羊の在処を訊うた。すると初平は、「すぐ山の東かたにいます。」と答えた。兄がそこへ行っても目に入るのはいしばかりだったので、戻ってその旨を初平に言う。初平は兄と一緒にその場所へ行き、「羊よ、立て」と叱ると、白い石は悉く変じて数万頭の羊になった。仙道を体得していた弟に、兄は教えをうけた。後に、二人は一緒に郷里に帰ってみたが、親族は死に絶えていたので再び引き返し、呼名を兄は魯班、弟は赤松子と改めたという。

この故事は、大小が流行していた江戸中・後期には巷間に流布していた。寛政元年（一七八九）の序がある「故事（必讀）成語考集註」（明）丘濬著、三宅元信註）には、「叱石成羊黄初平之得仙」と採録して註釈を施している。

そもそも「神仙伝」は、藤原佐世撰「日本国見在書目録」二〇巻「雑伝家」の条に、書名、巻数、撰者名が記されており、平安朝初期にはわが国に存在し、一部の知識階級には黄初平の故事は知られていたことであろう。「神仙伝」は以後も、「漢魏叢書」や「夷門廣牘」に収められてわが国に伝来している。黄初平の故事は、さらに「太平廣記」、「仙苑編珠」、「雲笈七籤」、「藝文類聚」、「太平御覽」、「北堂書鈔」および「初學記」等の類



書にも掲載されており、江戸中・後期に至っては人口に膾炙していたと推察できる。

図II II

図IIは「琴棋書画」と呼ばれる天明七年註五の大小曆である。琴棋書画は四芸と呼ばれ、中国ではこれらを嗜むことが高士の条

件とされた。鈴木重三氏に依れば、この四芸を楽しむ情景が画題として取り上げられ、やがて伝統化した。様式も一図中に四芸すべて描き込むものや、一図一芸の四幅対としたものがある。ここでは一枚に四芸すべてを描き込んでいる。即ち、画面に琴と棋局を配し、二美人がそれぞれ書と絵筆をとる姿を描く。描かれた絵は、老人と岩石と羊、書には「天明七大正四七九十三」とあって、天明七年の大小曆と知れる。

絵師は肉筆画にすぐれ、濃艶な美人風俗画を遺した歌川派の祖、一世歌川豊春（享保二〇（一七三五）—文化一一年（一八一四））。彫師は、画面右下「豊春画」と記す左脇に、小さく「松魚刀」と刻しているので、岡本松魚と判る。松魚については詳細は不明であるが、無款「狐の嫁いり」（明和二年（一七六五））の紙帙表書や鈴木春信「絵本いろは歌」（安永四年（一七七五））、初代北尾重政「絵本世都之時 上巻」（同年）、さらに天明六年（一七八六）初代重政、一世豊春、寛政五年（一七九三）勝川春英、同六年（一七九四）初代重政の大小曆にも名前がみえ、明和（一七六四—一七七二）から寛政（一七八九—一八〇〇）期にかけて活躍した彫師であることが判明する。

一体、大小曆に彫師が名を入れる例は多くはない。彫師として著名なのは、松魚の他、同じく明和—寛政期に作品が見られる二代吉田魚川、中出斗園、東扇（姓不詳）らである。彼らには絵師との間に自づと専属関係が生じていたようである。松魚は豊春の他に、初代重政や勝川春英等が描いた大小曆を数点刻している。また、斗園は勝川春朗、菱川宗理等が描いたものを手がけている。

豊春には明和七（一七七〇）、八年（一七七二）頃の作といわれる特大判四枚の組物美人面錦絵「琴」「棋」「書」「画」がある。註六豊春習作時代の作品で、この揃物中「書」が、明和の駒井美信の構図をそのまま借りているところから、この他の作品にも粉本があるのかもしれないとされているものである。註七大小曆「琴棋書画」は、この美人錦絵より約一五年後の作品で、一人の浮世絵師として世間的にも認められた豊春が、かつて勉強中に描



いた主題を集約して創作した、いわば旧作の焼き直しである。しかし、当時一流の絵師と、同じく一流の彫師が合作した貴重な作品ということが出来る。

図III

図IIIは天明七年丁未（一七七八）の大小曆晋武帝羊車遊宴

註○
 図である。長く伸びた松の枝の下に羊車に座乗する晋の武帝（二三六―二九〇）を描き、二頭の羊の前方に一列に弧を描いて並んだ宮女二人を排す。宮女は筒袖上衣に裙、肩には領巾を垂し、手には各人竹枝を持っている。その竹葉は漢字で、手前より一月から一二月を表現している。竹葉を以って字を表現する例は、既に中国では見られ、西安碑林の「関帝詩竹図」（康熙五五年（一七一六）、杜陵（陝西省長安城東）の韓宰（不詳）

が建立）には、「不謝東君意、丹青独立名、莫嫌孤葉淡、終久不彫零」と五言四句の一首二〇字が刻されている。

鶻色の筒袖上衣に赤い領巾を着けた宮女が手に持つ竹枝は、正、四、七、九、十、十二、灰色の筒袖上衣に鶻色の領巾の宮女は、二、三、五、六、八、十一の字で、どちらかが大または小の月を表わしていると考えることが出来る。干支は画中の羊車で未と判る。大小曆が作成された貞享頃から明治初期にかけての約二〇〇年弱の期間に、一、四、七、九、一〇、一二月が大または小の月で未年は、大の月が一、四、七、九、一〇、一二月で、小の月が二、三、五、六、八、十一月の天明七年丁未以外にはない。従ってこれも同年の大小曆ということになる。

当図は、宝永元年（一七〇四）、中村昂然作、尾田玄古校、読本『通俗続三国志』（三七卷総目譜系一卷、三八冊、別書名『続通俗三国志』）巻之二「陶瑣郭欽諫徹兵」に主題を採取している。そこには、

爰に帝は詔ありて、江南の美女を撰び、又孫皓が宮人五千を併せて、掖庭に是を在き、日々に歌舞を教習し、酒を巡らし樂を演ぶ。後宮の綵女、天姬内院に充滿し、殆ど萬餘人に至りける。毎日各宮に遊伴す。其供奉には、歌舞美女の類も、百を以て相隨ふ。自らは輕車に乗り、羊を以て拽せつ、自ら行き自ら適く。何れなりとも羊の止處の宮にとどまって、其の中に宴飲し、既に日の夕に至る時は、爰に即ち止宿をなす。されば各宮の妃嬪、みな帝の倖を得、恩あらん事を冀ひ、籠に沾はんと競ふゆゑ、爰にさまざまの計を相構ふ。或は竹の葉を門戸に挿み、羊の爰にしばし

も止らん事をはかる。或は鹽汁を地上に洒ぎ、羊の至り来るを待つに、羊は鹽の氣味を喜び、地に就てはやく是を蔽り、足を住めて行かざるに、宮女共既に車駕の、此門に滯りを見るより、早速に迎留めて帝を宮に誘き入れ、燕會を催しける。かくて日の夕になれば、一宿をこゝにして、武帝を他宮に歸らしめず、毎夜日此の如くなりければ、政事は日々に荒みけり。

とある。この『通俗続三国志』も、淵源は『晋書』卷三十一列伝第一胡貴嬪の

平呉後復納孫皓宮人數千自此掖庭殆將萬人而並寵者甚衆帝莫知所適常乘羊車恣其所之至便寔寢宮人乃取竹葉挿戸以鹽汁灑地而引帝車然芳最蒙愛幸殆有專房之寵焉
に由来する。

江戸期にあつては、中国書は長崎へ輸入され、直接読まれたりあるいは翻刻・翻訳されて広く町民層にも利用されるようになった。特に軍談物ともいべき講史小説類は盛んに翻訳された。齋藤護一氏に依れば、寛文元年長崎の人前田増武（註六）によって訳された『明清闘記』（一〇巻首一卷）を初めとして、元禄年間には、『三国志』を訳した『通俗三国志』（五〇巻、湖南文山、元禄二自序）、『兩漢演義』を訳した『通俗漢楚軍談』（一五巻、夢梅軒章峯・称好軒徽庵、元禄三序、同七跋）、『東周列国志』を訳した『通俗吳越軍談』（一八巻、清池以立、元禄一六刊）等、宝永年間には、『戦国策』を訳した『通俗戦国策』（一八巻、毛利貞斎、宝永元刊）、『皇明英烈伝』を訳した『通俗元明軍談』（二〇巻、岡島冠山、宝永二刊）、『梁武帝演義』を訳した『通俗

南北朝軍談』（一五冊、長崎一鶴、宝永二刊）、『隋唐演義』を訳したと見られる『通俗唐玄宗軍談』（二〇巻、中村昂然作、林九成校、宝永二刊）等、下つては、『開闢演義』を訳した『通俗列国志十二朝軍談』（一四巻、李下散人、正徳二刊）、『岳武穆演義』を訳した『通俗兩國志』（二六巻、入江兼通、享保六刊）等がある。『通俗続三国志』もこれらの一群に属するものであることは言を俟たない。中国の歴史小説類が翻訳され、書き下されて、当時の読書界を賑わしたのみならず、中国語が一般に普及し、俗語で書かれた中国通俗小説にも関心が向けられ、この訓点本・翻訳本が読書界に登場してきた。

宮女が手に持つ竹には、常緑で根がはびこつて繁茂し、そのため盤石であり、天に向かつて伸びようと、節をもつていながら柔軟で力強い特性がある。このような特性を天子と結びつける考えや、前漢の文帝（紀元前二〇二—一五七）の子である梁の孝王が御苑に竹をたくさん植えて修竹園と名付けた故事によつて、竹がたくさん生えている庭園を「竹の園王」といつて皇族の異称になっていることが、作者の念頭には知識としてあつたものと思われる。

また、図中の松も樹木の長生と常緑から、節操、長寿、繁茂など縁起のよいものとして称せられてきた。さらに、松は松位といつて大夫の位をもつている。即ち、『史記』卷六「秦始皇本紀」に「乃遂上泰山立石封祠祀下風雨暴至休於樹下因封其樹為五大夫」とあつて、秦始皇帝がその二八年（前二一九）、泰山に登つて暴風雨に遭遇した時、松の木陰で身を避けることができたので、その松に五大夫という秦の爵位を授与したといふ。

武帝が座乗する羊車も、漢劉熙撰「釋名」卷七「釋車」の項に、「羊車羊祥也祥善也善飾之車今犢車是也」とあって、これも吉兆物であることが分る。

因みに、羊が紙を好んで食することは周知のことであるが、竹の葉をも同様に食することはあまり知られていない。しかし、源平・鎌倉初期の政局の真相を詳述した九条兼実（一一四九—一二〇七）の日記『玉葉』文治元年十月八日の条に、「丁巳、天晴、和泉守行輔、進羊於大將、其毛白如葦毛、好食竹葉枇杷葉等云々、又食紙云々」とあって、竹の葉も好物であることが分る。

中国の古典に取材しながら、年始の配りものとするにふさわしいものを描いた作者の識見と、これを咀嚼可能な江戸時代町民層の知的水準を看取することができる作品である。

IV

図Ⅳ「長久齡」は、唐玄宗朝の宰相張九齡（六七三—七四〇）の詩「照鏡見白髮」に取材した大小曆（註六）。人生の哀愁を詠んだ当詩は、『全唐詩』には載っておらず、張九齡の全集である『曲江集』に、「照鏡見白髮聯句」として収められている。全文は次のとおりである。

宿昔青雲志

宿昔青雲の志

蹉跎白髮年

蹉跎たり白髮の年

誰知明鏡裏

誰か知らん明鏡の裏



図Ⅳ

形影自相憐 形影自ら相憐まんとは

（かつては輝かしい未来を夢みる大志を抱いていたが、なすこともなくうらぶれて、いまは白髮の生える年となってしまった。曇りない鏡の中をのぞきながら、わが顔とその影と、たがいにわが身の上を嘆くばかりとなるうとは、誰が予測したであろうか。）

画中「長久齡」の長は張に、久は九に音が通じる。先づ、「久齡」の「久」は小の字でつくり、「長」と「齡」に盛り込んである数字は小の月であることを示している。「長」に三、五、十、「齡」には正、王（閏のこと。門構えを省略している）、八、十二が見える。小の月が閏正、三、五、八、一〇、一二月は天明四年甲辰（一七八四）である。

大または小の文字および各月の数字を寄せて、ある文字に似せた、所謂字もじりの類は擬字大小と呼ばれるが、この種のアイデアは大小曆作成期の早期から用いられ、宝曆や明和期には既に作例が見られる。擬字大小はアイデアとしては一般的で、末期まで継続して創られた。

漢詩を学び、張九齡のこの詩に感銘を受けた人物が、これを主題にした大小曆の創作に思い立ったのであろう。

むすび

日本は明治になって西洋文明を受入れるまで、上古以来中国の文化圏にあって、文物・制度など中国の影響を受けているものがほとんどである。ここに紹介した大小曆などは、日本で考案された数少ない文物の一つであらう。しかし、こうした日本固有の「文化遺産」とみられるものにも、実は中国の文様がくつきりと付着しているものがあつたのである。

拙稿では、中国の故事、伝説などに取材した大小曆四点を紹介した。国立国会図書館はこの他にも、「諫鼓鶏」や「胡蝶の夢」などに題材をとつたと思しき大小曆を所蔵している。これらについては、首尾よく図様を解明でき、且つ発表の機会に恵まれたら紹介したい。

註

一 展示会目録「日本の曆—国立国会図書館所蔵個人文庫展 その3」
国立国会図書館編・刊 一九八四 五九頁

二 「絵曆」(請求記号WA三三—)所収。原書名は「惠合余見」二冊。天明から文化年間の大小曆三〇〇点余りを取める。その中には、歌川豊春、鳥居清長、司馬江漢、窪俊満、葛飾北斎らの作品が含まれている。

三 「中村仲藏相勳申候寿今様図(天明七年)」「銀長羽織黒仕立通言縮面類」(寛政三年)、「竹生鳴鼓鳴金花山相笏祈江嶋」(寛政九年)等。

四 下見隆雄氏の調査に依れば、皇初平とする典籍もある。黄初平とするもの「漢魏叢書」本「神仙伝」、「雲笈七籤」、「芸文類聚」、「北堂書鈔」。皇初平とするもの「夷門廣記」本「神仙伝」、「太平廣記」、「仙苑編珠」、「太平御覽」(葛洪「神仙傳」について)(二)(「福岡女子短大紀要」第八号(昭和四九・二二)頁六二、六三)なお、筆者の調査では、「芸文類聚」巻九

四は「皇初平」とする。

五 註二所収。

六 「原色浮世絵大百科事典 第四巻、画題—説話・伝説・戯曲—」大修館書店 一九八一 頁五一

七 長谷部言人著「大小曆」宝雲堂 一九四三 頁一四九

八 鈴木重三著「豊国」集英社 一九七五(浮世絵大系 九) 頁七五
九 前註 頁一三一

二 註二所収

二 塚田康信「西安碑林の研究」(西安碑林の研究刊行会 一九八三) 頁一六二—一六三

三 宝永元年(一七〇四)と正徳六年(一七一六)刊の版本がある。

三 中国、三國時代呉第四代の皇帝。二四二—二八四。在位二六四—八〇。

四 早稻田大学編輯部編「通俗二十史 第六巻 通俗統三國志」早稻田大学出版部 一九一一 頁二八

五 「江戸儒学の諸問題」(近世日本の儒学—徳川公継宗七十年祝賀記念—)岩波書店 一九三九 頁八七八—八七九

六 石崎又造著「近世日本に於ける支那俗語文学史」(弘文堂 一九四〇) 頁一八一本文では前園會武、頁四一四巻末の附録二「近世俗語俗文学書目年表」では、紀州、長崎住人、前島喲武とする。

七 註一五、頁八七九

- 二六 『天明繪曆』(請求記号八四一―二二七)所収。当書には天明期(一七八一―八九)の大小曆八七枚を貼り込む。
- 二七 読み下しおよび解釈は、前野直彬注解『唐詩選(中)』岩波書店 一九八三 頁三〇六―三〇七

(あいじま・ひろし 図書館協力部国内協力課)